

秋葉安太郎氏「大鏡の研究 下巻 語法篇」を読んで

——特に大鏡の位相性という点について——

森野宗明

大鏡の文法的、また語彙的事項を、近衛家本を底本として同系の千葉氏本・東松本・平松本・桂宮本を校合して得た本文に基き、山田文法の立場から、「奈良朝文法史」「平安朝文法史」「平家物語の語法」に則って、調査・整理したものである。

本書の成立・狙いについては、著者は次のごとく述べている。

現在まで公刊されている主要な国語史研究成果は、山田孝雄氏の前記三著の他、橋本進吉氏「古本節用集の研安」「文禄元年 天草版」、吉利

支丹教義の研究「古代国語の音韻に就いて」、春日政治氏「西大 寺本 金光明最勝王經古点の国語学的研究」、湯沢幸吉郎氏「室町時代の言語研究」「徳川時代の言語研究」「江戸言葉の研究」、遠藤嘉基氏「訓点資料と訓点語の研究」等であるが、これらに洩れた資料

料についてその研究の後を継ぐのは国語学研究者の義務である。かかる義務感から「平安朝文法史」で扱われなかつた大鏡を特に

取り上げ、そこに平安末期院政期の語法現象を、また大きな変動の現われている鎌倉期の語法への関連をさぐろうとしたのである。

内容の構成は次のようである。第一章序説・第二章代名詞（五節よりなる）・第三章形容詞（六節）・第四章動詞（四節）・第五章存在詞（アリ・ヲリ・ハベリ・イマソカリおよびアリを根幹にした語群、八節）・第六章複語尾（八節）・第七章副詞（九節）・第八章助詞（七節）・第九章音便（五節）。

序説には、大鏡における顕著な語法現象が解説、概観されている。本論の要旨であり、著者によって注意されている事項がどのようなものであり、いかに史的説明が与えられているかが簡明に知り得て便宜である。指摘されている現象を、若干例示すれば次のごとくである。○代名詞ワレを対称に用いていること。ソレ・ソコを対称に転用していることとともに、代名詞の史的変遷、史上（？）注目すべきである。○形容詞の敬語ハ御十形容詞ハ、名詞に熟合した御心ブカシが一例みえる。形容詞における敬語発達の初期の状態を示す。○動詞触ル・忘ル・垂ル・止ムは下二段の例のみであり、隠ル・恐ル・乱ルも大部分下二段に活用する。これは四段の動詞が下二段に移動する過程を示す。○副助詞スラは用いられず、その変形とおぼしきソラが一例だけみえる。この助詞の衰兆が覗える。一方ダニが用法を拡張し、スラに近く、また

サへにも近く用いられ注意される。○首韻現象としては語頭母韻の脱落したものが指摘される。アザル（戯ル）からザル、オハサウジからワサウジが生じている。またムトスの約ムズをウズとした例があり、鎌倉期におけるこの種音便現象の前兆とみることができるといえる。

## 二

従来まとまった語学研究書が出ていない当資料について、かく諸現象を調査・整理されることは学界にとってまことに有益な仕事であることは言をまつまでもないが、卒直にいつて、その把え方、史的位置づけという点においては、必ずしもただちにうべなえないところが散見するようである。以下いくらかの例を挙げて卑見を述べておく。

序説・概観の条の第一に代名詞ワレを一例ではあるが、対称に用いている事実を指摘し、「中称代名詞の「ソレ」「ソコ」を対称に転用してゐることと共に、代名詞の史の変遷史上注目すべき現象であらう」としている。ワレを対称に用いた例を重視するのはもつともなことであるが、ソレ・ソコを対称に用いる現象と同一に扱うのはいかがであらうか。ソレ・ソコを対称に用いた例は大鏡以前の諸作品に散在しており、ワレを対称に用いる現象としては、史的比重がぐっと違ってくる。なお、ワレを対称に用いることは、ほぼ同時代の讃岐典侍日記にも存する。欲をいえば、ハワレを対称に用いるのは感情の興奮した時である。またハ対者を卑め罵る時である。Vという説があるが（松尾捨治郎氏「国語法論攷」

など）、大鏡の例はどうであるかといった点についても及んではしいところである（大鏡の例は実類の伝の条で、佐理の能筆について語るところにみえるもの。明神が佐理に向つて述べることはであるが「我にかかせ奉らん」のように敬語を用いている。讃岐典侍日記の例も敬語を用いており、院政期のものについては——以降のものについては未調査であるが——必ずしも対者を卑め云々の説は当たらないようである。つけたりまでに）。

なお、ワレとソレ・ソコを同一視するということは、比較参照している作品が、必ずしも広きにわたつていない点に、また詳細に検討されていない点に一因すると思われるが、同じ事情から事実には合わないと思われる解説の下されている例は、他にも若干存するようである。たとえば、形容詞に接頭辞「御」を冠した敬語法を吉野朝以降の発生のように解しているふしがみえるが、「とはずがたり」などによれば鎌倉末期までには成立し、ある程度流通していたと考えるべきであらう。また、終助詞ナ（いわゆる詠嘆のナ）が「大鏡の著作時代には話語の上に多く用ひられ、殆ど俗言化したことを示す現象ではないか」と考えているが、先行諸散文学作品でもナは会話部に集中しているのであり、大鏡の時代をまづて顕現した現象ではない。特に俗言化ということは、その限りでは云々すべきではない。

また、従来の、特に最近の研究成果が充分に活用ないし参看されてないというらみがある。助詞のへとニについて、へを方向、ニを場所とする規定は、もう一度たちもどつて検討する要があるはずだが、山田孝雄氏の説にそのまま依拠し、へに場所を示す用法

があることを特記するにとどまっているのは、最近の青木侖子氏などの研究に目を向けなかったためであろう。青木氏の二に比較してへは遠心的用法のみを持つとする考え方は場所・方向を持ち出すのに比しより説得力に富むと考える。もつとも氏のいうことく平安中期においてもへはその用法を厳守し、二と截然区別があった、とするには若干の疑いを感じるが)

オハスを四段・下二段とするのも山田氏の立場そのままの踏襲である。宮田幸一氏の研究など活用されていないようである。最近はサ変説が有力であるが、たしかに平安中期以降の作品群では、サ変として整理しうるような現象を呈示している。原初からサ変であったとする宮田説や金田一京助説には賛成できないが、この限りでは平安中期の活用がサ変乃至サ变的とすることは認めてよからう。とすると稀にみえる四段あるいは下二段の例はどう解すべきか。この作品にもそうした例がある。サ変説をも充分考慮に入れ、たとえば、「内大臣はいかがおはすなどいふに」の例文など取り上げればあるいはおもしろいことになるのではないかとと思われるのだが、用例の列記に終っているのは物足りない。

オハサフズの類をオハサムトスと解するについても同様のことがいえる。用例に推量の意を全く含まぬものがあることからみてもを想定するのはおかしい。宮田幸一氏他の論があるのだが。もつともオハサムトス説は、氏以外でも、今だにとっている人が多いようだが。

また、語の語性や活用形の用法への深い考察を欠くために、本来その語性や用法から必要的にもたらされていると思われる現象

を、ただちに史的に位置づけて説いてしまっているようなところも若干ある。形容詞の未然形が熟語の形容詞（キコシメシハテマホシを指す）に一例のみであることを指摘し、「現代の国語における未然已然の区別の消滅してゐる現象と思ひ合せる時、そのこゝに至る端緒は既に平安朝末期に始まってゐることが知られる」とする。形容詞の未然形（最近は未然形を設置しない立場が強くなりつつあるが、一応未然形をおくとして）の用法は他の活用形に比し狭く、仮定条件法の構成に存するのみである。しかもバを伴う用法は、その一部をカリ活用＋マシカバ（マセバ）に譲るから、必然的にそれが用いられる機会はこの活用形に比してずっと少ない。従つて未然形の例が少いということは、平安末期に始つた現象ではなく、源氏物語その他先行諸作品においてもほぼ同断である。また、大鏡以降の諸作においても、大鏡同様未然形が全く欠如しているということであるならば、そしてそのような現象を呈示している最初の作品が大鏡であるというならば、当該現象は、史的に高く評価されてもしかるべきだろうが、実際は、以降のものにも、長期にわたつて依然として未然形は用いられているのであり——氏のしばしば援用する「平家物語の語法」にもかなりの例が挙げられている——彼此相俟つて氏の解釈には従い難い。当該現象はむしろ、偶発的なことがら、たまたま形容詞未然形の仮定条件法を必至にする場面が設定されなかつたからとでもみる方が、まだ自然であろう。なお、前述の終助詞ナにしても、その語性を考慮するならば、会話部に集中するのが当然であることがただちに了解されるはずである。

動詞四段活用の下二段化の過程をとくくだりにしても、その適例として挙げられてある語群のうち、タル（垂ル）・ミダル（乱ル）・ヤム（止ム）などは四段と下二段では自他の対立が存し、意味用法を異にするが、その区別が無視され、その点への考慮が払われていない、ために説得力がかなり弱められている。

### 三

最後に大鏡の位相性に関して一言。従来、大鏡の位相については、登場人物の社会的地位から、下層社会の言語が反映しているふしがあるということが述べられている。これはたしにその通りで、その観点に立たなければ、説明し難い現象にしばしば逢着する。しかし下層社会という概念の導入だけでは充分とはいえない。主要人物の繁樹・世継の二人が世にも稀なる高齢者であることへの留意も怠つてはなるまい。階層という社会的位相の他に、シムという助動詞が使用されているが、秋葉氏は「この語は主として敬意をあらはすに用ひられたものではあるが、新興語『す』と『さす』に比較すればその勢力は微々たるもので、延慶本平家物語に到つては更に衰へ僅か一例に過ぎない事を思へば、大鏡はこの語の衰微する過渡的状态を示してゐるものと言へよう」と述べている。これでは、大鏡以前の作品には、より多くの用例が存するかのような口吻であるが、事実はさうでないことはいふまでもあるまい。シムの例をかなり含むという点では、大鏡は浮き上がった存在である。これを下層社会の言語の反映としても納得のゆ

く説明とはならない。もしそうなら、今昔物語集の世俗の部、平家物語などにも近似の現象が見えてもよさそうであるのに、そのような事実は見出せないからである。大鏡での用例をその談話者との関係から眺めると、すべてが老人に集中しており、侍などのところには用いられていないこと（たとえば、侍が語る小一条院東宮退位の真相のところなど、かなりの用語量を持ち、かつ最上級の尊敬語が頻出して、シメタマフなど混入していてもよいと思われる個所であるが、セタマフ、サセタマフのみを用いているのである。）がわかる。

これは、談話量が老人に大きくかたよっているという制約を計算に入れても、なおシムの使用が老人のことばと密接に関連づけられていることを物語ると解するのが妥当であろう。源氏物語でも三例のシムはすべて高齢者の会話部にあつた。宇津保物語では、古く富士谷成章が「あゆひ抄」で指摘したように、特異なシムが繁野真管という偏屈な老人の会話に限って使用されていた。貴族社会の日常口頭の用語からは遠くへだたっていたシムを、特に、混入・駆使することによって時代離れた老人の特異な一面を浮き彫りしようとしたのであると考えてはいかなものだろう。人物描写の道具として意図的に使用されたとみるのである。

このような眼でみると、ごく稀ではあるが、四段活用の恐れ、隠ルという古形が、同じく老人の談話にのみ用いられているのが注意されるのである。（なお法華百座にも敬語シムの例が散在する。僧侶は訓読語に習熟しているために、日常の談話にもこの種の語を混用することがあつたと思われるが、訓読でス・サスを抑

えて専用されるシムを、日常では更に拡張して、ス・サスと全用法において同義に用いた、つまり敬語としても用いた。そのためシメタマフ式の言い方が説教類にも姿を見せるのだろうと解される。

これは位相論的観点に立った用語の一試解である。この解そのものは多分に思いつき程度のものであるが、現象をただちに史的変遷という枠にはめこむ前に位相論の立場からも検討してみることが望ましいことは論をまつまでもない。氏の考察には、残念ながらこうした配慮がほとんど払われていないように思われる。敬語などもこの面から整理するといろいろの問題を含んでいるように思うのだが。

時にみられる位相論的解釈にも正鵠を射たとはいえないものがある。たとえば三例用いられている自称代名詞マロが、たまたますべて高貴な人物の話中ということから、ただちに「貴人の用ひた」ものとするとき、マロがその使用者の身分と特に密関していないことは、源氏・枕を引くまでもなく、ほぼ同期の今昔物語集などの例からもうかがえる。これは、むしろ対者との社会的・心理的親疎関係といった面から考えるのがよいのではないか。

#### 四

できたものについてとやかくいうのはやさしいが、大部のものをまとめ上げるのはむずかしい。非礼の段は生意気な若輩者の妄言として御寛恕たまわりたい。なお誤植が若干ある（七二ペ-2行 宇洋保物語↓宇津保物語）。それから著者にお願い。索引がない

のは非常に不便である。（桜楓社出版・二五〇〇円）